澀江脩傳

單

H 20
519

澀江脩略傳 附句鈔

東京帝國大學圖書之印

B 23475

澁江脩ノ履歴、

安政元年十二月十四日生

○明治三年一月ヨリ仝九年十月迄、（十七才）東京神田区山本町漢學私塾 海保弁之助ニ就キ皇漢學修業、

○明治二年三月ヨリ仝四年十二月迄、故海軍大尉 山澄直清（吉蔵）ニ就キ數學簿記學修業、

○明治四年一月ヨリ仝十年四月迄、（十八才）東京府下ニ於テ大學予南校、本所松坂町共立學舎、（四年八月九日入学）淺草（三味線堀）西鳥越文明義塾、本所緑町遷喬義塾、芝公園地内英人キーリング、築地三十三番サムマー、三田慶應義塾、等ニ於テ英學及英語學修業、

○明治十年五月ヨリ仝十三年三月迄、（二十四才）東京々橋区尾張町三丁目東京魁新聞編輯人トナル、
（四年十二月三日（新校ノ日）梅浦精一ニ入門ス五年 梅浦ト共ニ文明義塾ニ入ル米人ガーヴナーヲ師トス）

○明治十三年三月（二十七才）電信局修技校ニ入學シ、仝年卒業シ、淺草電信局、神戸電信局等ニ在勤ス
（○十一二年ニハ漢文ヲ母ニ英文ヲ保ニ受ク）

鷗外藏書

○明治十五年一月工部技手ニ任ゼラレ　日本橋電信局　東京府廳電信局ヘ手ニ
詰合ス、（二十九才）

○明治十七年十二月依頼免官セラル、（三十一才）

○明治十八年一月ヨリ仝廿一年十二月迄、静岡縣文武館學科教員タリ、（三十二才）

○明治二十年十二月ヨリ仝廿一年十月迄、静岡縣警察本部嘱托英語教師タリ、（三十四才）

○明治廿一年八月（静岡市鷹匠町三丁目）私立認可濫江塾設立　塾主兼教員タリ、（三十五才）

○明治廿三年六月ヨリ仝年十二月迄　東京ニ於テ　麹町区飯田町補習學會
神田区猿楽町　有終學校等ノ英學教師タリ、（三十七才）（△妻ノ了）

○明治廿三年十二月、鉄道廳第二部傭員トナリ　袋井驛電信係ヲ兼テ勤務ス、

○明治廿四年六月、佐野驛々長助役トナル、（三十八才）

○明治廿五年七月、依頼傭ヲ解カル、（三十九才）

○明治廿五年七月　東京京橋区　西紺屋町　株式会社　秀英舎ニ入リ漢字校正課
課長トナル

○明治廿九年一月　仝舎市ケ谷工場ニ於テ　欧文校正課々長トナル、（四十三才）（△俳句ノ了）

○明治三十五年十月、退舎（四十九才）

○明治三十五年十月、東京京橋区　宗十郎町　國文社々員トシテ　校正課長トナル、

○明治三十六年七月、退社（五十才）

○明治三十六年九月（静岡市安西一丁目南裏）ニ静岡私立濫江塾開設、
（当時ノ静岡縣立静岡中學校長、川田正澂氏ノ推薦ニテ）

○明治三十八年十二月　都合ニ依リ閉鎖（五十二才）
（川田静岡中學校長前年宮城縣第二中學(仙台)校長ニ栄轉シ
河合山良氏轉任シ来リ　静岡中學ノ規則　稍変更アリシ為メ）　山形中學校長

○明治三十九年上京（五十三才）

○仝時ニ東京小石川区久堅町　博文館印刷所校正科ニ入リ　取締トナル
（死去七日前マデ　継續勤務）

○明治四十一年四月十三日　死去（役場届出）　五十五才

（四十一年ノ四月四日頃稀ラシク大雪降リ気候激変ノ際感冒ニカヽリ六日ヨリ臥床シ毛細気管支炎ニ変ジ十三日夜十時死去）（奉行院真教日達信士）

家族関係

○渋江脩（戸籍面　安政六年二月四日生）（明治四十一年四月十三日亡）

○妻　さだ（明治二年一月九日生）（静岡市、福田竹次郎長女ニシテ今村安倍郡豊田村豊全ノ素封家海野寿作氏ノ娘分トナリ明治二十一年静岡市鷹匠町二丁目ニ静岡渋江塾開校ノ当時婚嫁、）

○長男、渋江終吉（明治二十二年十二月一日生）静岡市鷹匠町二丁目ニ於テ、

○（明治廿七年四月十五日亡）次男、〃　行晴（明治廿五年　生）東京市芝区愛宕下町ニ於テ、

○三男、〃　忠三（明治廿九年一月十三日生）東京市牛込区廿騎町ニ於テ

○（明治三十八年一月十七日亡）長女　〃　花（明治三十一年十一月生）仝所ニテ

○四男、〃　末男（明治卅五年十一月五日生）仝所ニテ

是ヨリ先ハ脩ガ習内ヨリ抜萃セル俳句ヲ録スノ了

（脩ハ俳句研究ヲ始メシハ廿九年市ケ谷工場ニ轉職ノ後ヨリ死去ニ至ルマデ継続）

○明治三十四年三月、二世桂之本琴糸宗匠（女）ヨリ文之本吟月ノ俳号ヲ許サレ仝時ニ免式用ノ句ヲ贈ラル句ニ

文月や六日も常の夜には似ず、

吟月作句

○花

捨鐘をひろふて戻る花見かな

さげてゆく花まま鐘の響かな

尽し後の花まる斯ふ日和かな

○万歳

万歳や奥よりもるゝ笑ひ声

○元日

春や　はれて座のものがたり

○春雨

春雨や庭にいたちの子を運ぶ

気が付けばみえる花や春の雨

あす遊ぶ望も出たり春の雨

○梅

ぬか雨に香りわかりけり庭の梅

寺の名や忘れて梅の花ざかり

香にくもる月夜や梅の唯白し

○雛

初孫に祝ふ見立てけり老夫婦

うつらうつらと見れば笑ふや雛の顔

愛らしや雛によく似た雛の容

○鶯

目を留めて見たり鶯帰りた枝

くもり空羽を鶯に忍びけり

鶯や撞かねばならぬ時の鐘

うぐゐすや帰るさまで目のはなされず

○鮎

かげろふとともにちらつく小鮎かな

○霞

山畑や霞の上の鍬つかひ

見通れど吾里つゝむ霞かな

道問ふた人もはるかに霞みけり

ひろびろと松山かゝる霞かな

遠近の山皆低し朝霞

行人の簑をはなれぬ霞かな

○乙鳥

ぬれて来た姿を見せぬつばめかな

つばめ子をよみて門さす主かな

○白魚

いつ見ても初ものらしき白魚かな

手に取て透すくふか白魚船

○蜂

初蜂の人をとおさぬ門かな

目にあまる野を任ふかくてふかな

蜂の来て人に春をふやしけり

○蚕

二つ三つ、そばに入れし蚕かな

○柳

いそがしき中に手を出す柳かな

灯して雨よつやもつ柳かな

○若草

若草や鼻おし付て牛の夢

若草やまたぎ越たる柳の笛

○蛙

かき消れて雨夜の友や鳴く蛙

探心にさはらぬ雨や鳴く蛙

○長閑

長閑さに道草摘んで戻りけり

長閑さや草の中から猪口一つ

○海苔

紅いた指の月立つや 何ずり 海苔

海苔の香や麦もら涼る橡の先

○弥生

鉢ふるを見付けり弥生空

塵塚に菜の花咲たる弥生かな

○凧

女堵して揚る子や凧を枕もと

切凧のつ糸る流れて小川かな

○松の花

住む多も同じ齢や松の花

荒牛来着せ栄よ松の花

○時鳥

夜の寂は退いて月なりけりほとゝぎす

眠近き夜の静りや不如帰

一声を三夜さに聞きぬ時鳥

不如帰骨中入れるや藤かな

立たずとも聞かるゝ物を時鳥

○牡丹

ぼたん切て心淋しき夕かな

おい塵も掃て客待つ牡丹かな

○松魚

鎌倉を生きて出たらし初かつを

売声もいそがしげ也初松魚

門に来てソレ呼びあへよ初かつを

○祭

淋しさに客人やとふ祭かな

○蝸牛

土塀とともに落けりかたつむり

かたつむり石に落ちたる音ぞ

○青簾

夏や来し松戸にかけて青簾

○水鶏

水鶏なくと人のいへばや佐屋泊

山風の静まる昼や遠水鶏

寺多に降り込められて水鶏かな

遠水鶏蘭を吹く風に紛れけり

○杜若

ふる中をそしらぬ顔や杜若

橋もたね家ある里や杜若

ためらへば花も切りつくし杜若

○清水

山鳥の尾をつけて行く清水かな

静かさは栗の葉沈む清水かな

うかるかと見て石掬ふ清水かな

づゝと鳴て五月淋し岩清水

○雲の峰

めつきりと様替りし雲の峰

池の立つ也の白ひや雲の峰

是程の川に水なし雲の峰

鯉はねる音に崩れつ雲の峰

○涼

舩唄を覚えて戻る納涼かな

人声の下りも戻るや納涼舟

涼しさや白帆のうつる床柱

○打水

打水や庭に影引く釣ともし

打水で涼しく待よるもし居るらん

○蝉

蝉鳴くや乾く香のする樹々の雨

土る寺や草の中にも蝉の声

比叡は蝉のものあり門榎

○蝙蝠

木ずくれて月にはちるか蝙蝠

○昼寝

熱さうにそつとのかみし昼寝かな

一つ来た昼にかしぐ小舟かな

○汗

風を慕ひ樹を慕ひ汗をぬぐいけり

○田植

はづかしと娘はうたはね田植かな

○月

年々の顔あり今日の月

山の木の皆遠しと今日の月

旅おしみて眺めし橋や今日の月

ききおりし人を休ます月見かな

○暑

夏あたる子に鍬あぶらで暑さかな

窓に来る工夫も去たる暑さかな

○扇

身にあれて思はずあふぐ扇かな

扇を左へうつす扇かな

○雁

腹にものおきて夜となりぬ雁の声

岩を浅く鎗根おろし雁の声

おりそれて江を越す暑し月の雁

夕ばつを羽うらに見て雁の棹

○虫

虫の音田おかふそうに虫合かな

○燈籠

水草の上にも燈籠の夜明かな

足拭れぬいで舟までゆくや燈籠の道

○花火

盲人の窓ゐめても打つ花火かな

○角力

あるたびに負けて知らるる角力かな

○秋風

秋風や寺びの蔵の何はなし

蔦の葉の残らず動く秋の風

○萩

白萩や踏まれても猶うつくしき

草刈よ今年はおもいか萩の露

○七夕

青空に一筋白し天の川

七夕や初めて見たる嫁の筆

○紅葉

草紅葉岩に秋のせまりけり

飛鳥の羽根も赤かりし紅葉かな

○鹿

ちばし付て菓供立てよ月の庵

うつとりと見て居るらしや月の庵

○燈籠

燈籠や人付つらしき谷の家

山寺は星すらき燈籠かな

○鬼灯

赤のくろゝゑつらでならぶし かち姉

ほゝづきや言はれても秋は満ちてゆく

○砧

川越せばこちらでもまた遠砧

人間の仕業と言げず遠砧

○霧

朝霧や風のうみ来す金山一つ

秋霧や東の方はうす白う

○新酒

辞儀すて来てみも新酒の池定かな

築山を見ればさめる新酒かな

○蜻蛉

暮るゝともえつらでや池にとんぼ釣

昔もして居た河がましとんぼ釣

○柿

腸に秋のしみたる熟柿かな

○初汐

初汐や鳴門の浪の飛脚船

橋に来て船集ひけり秋の汐

○稲妻

いなづまのかきまぜてゆく闇夜かな

稲妻や跡まるぬるき星の飛ぶ

○菊

菊の香や瓶にさゝぼそくみにまで

げにかにありて菊作ろふ見ぬけり

○雪

乞食の来いぞ降る夜の雪

竹の雪落ちてすゞめの降る夜かな

雪の日や子のまそ行く座敷 [来ん]

海までは色あき野末人紙の雪

○鷹

鷹の目に遠山梢うつりけり

○時雨

松原のすゝきるをみ時雨かな

おもひだし降る時雨かな

天地の時とざして時雨かな

時雨るや松原に馬士一人

○千鳥

立てまた居てまた月の千鳥かな

風て行れ吹かれ猫一つの千鳥かな

時すいて扉にいる坂を孫千鳥

声しに旭引き千鳥かな

○炭

炭の香や夜の帰り行く物の音

うた扉にはかなき炭の崩れかな

花すゝき進にあかれて炭俵

○神楽

謹みて神代思ふや里かぐら

ますらをの面着てやさし

里神楽

○足袋

かさたびの四十日足を包み込ぬ

○水仙

雨にさへ水仙きよき色香かな

○寒さ

鳥も去まず机にむかふ寒さかな

台所のくらり向きて縫ふ寒さかな

寒いとも言はでこらゆる寒さかな

星一つ土佐一本のさむさかな

○除夜

帰て寝くり鄙の安さよ除夜の鐘

○風

風や常に足とられぬ野の小家

風やかぜ乾く石燈籠

○氷

あら海や松に投る氷かな

うす氷打回のまきの茶巾かな

○小春

辻占聞く稿の小春かな

夕陽のまゞに寒し小宵

宣中に一時斗りの小春かな

○水鳥

水鳥の羽音蹴上るうねりかな

○煤

すゝ取て寺は出でる仏かな

何すつめて追ばんすゝ払

○頭巾

擢すだれ鼻で分たる頭巾かな

和尚の皆頭巾着てお庭かな

○いとど

よりたうし擢のもとふらふら鳴くいとど

○夏草

夏草の上を辷らす田舟かな

○青田

ま上げ風のひろがる青田かな

○夏木立

遠山や杉四五本の夏木立

○土用

生垣もまばりに垂りし土用かな

○河鹿
谷川を月はすべりて鳴く河鹿

○夏の月
山村は降たゞ咲くや 夏の月
帰て見たきは 銭の上や夏の月

○蚊帳
月のまて枕まへたる蚊帳かな
月影に松をうつして蚊帳かな

○閑古鳥
来し道は雲にかくれて閑古鳥
鐘の音も聞かぬ山路や閑古鳥
倒れ木の橋も渡らず 閑古鳥
閑古鳥 住みし 都と思ひけり

○昼寝
やがて切る木影に松の昼寝かな

○夏羽織
すこし詫びる程 吹かれけり夏羽織

○心太
来る客は山のけぶたや心太
山近き律の朝やところてん
木兎の子の訪ずく里や 心太
里遠き 野寺まれやところてん

○五月雨
舟の灯の昼もみえけり五月雨
音もなき庭の溜りや五月雨
とらを打つ音けりあり 五月雨

○夕立
夕立の音のみ過て晴れにけり

○朝顔
朝顔や星もまばらに 残る月
朝顔の名を宅毎に問はれけり
朝顔や星影はまだ井に残る

○蚊
うかうかと身ついて来る蚊にさされけり

○西瓜
手にとりて たゝいて見たる西瓜かな
西瓜ほど真二つに 切られける

○納涼
噂つ話りも寄りね 納涼台

○鮓
鮓釣て戻りて母の夕飼かな

○芥子
芥子咲て おかくさめこらへけり

○茄子
ぎしぎしつりて 茄子と知られし 色かな

○菖蒲
泥土の伏て寛けり 花あやめ

○蓮
白蓮は晩残されし 月の影
蓮池や浮葉すれすれの通り雨
蓮の香や五百羅漢は皆笑顔
朝しや蓮の匂ひを 起ごろ
蓮の香に夜を寝ぬ身の悩みかな
蓮の花昼も夢見て居りけり

○青嵐
不足なき田の曙や 青あらし

○日盛り
日盛りやあ汲ゝにある人と棒

○毛虫
雨の日は葉うらに夢の毛虫かな
玉となりて枝の毛虫の落ちけり

○稲雀
何かふるかと思ひけり稲すゞめ

○二百十日
気が付てめでたし二百十日かな

○秋の蝶
手に触て見て逃しけり秋の蝶（乗せ）

○秋の雨
秋の雨そゞろに寂を深めけり

○秋の蝶
美しき程哀れなり秋の蝶

○残暑
川添の家にも残る暑さかな
山里の雨間に残る暑さかな
不図止んだ風にも残る暑さかな

○栗
毬さえて渋みまでなり栗の宿

○一葉
夜深みの寂に音すく一葉かな

○八朔
八朔や年寄すちゞくに蜘の糸

○唐からし
秋は皆しみて淋さに唐からし
夕日をうす山根の赤し唐からし

○秋の声
かし林の穂草に来る声秋の声
松風の空にも何の声秋の声
柏手も秋の部なり山やしろ

○閑寂
言声で馬すゝれいふ閑寂かな

○秋の暮
秋の暮隣のくさめ哀へけり
善淋し座り直して見ても秋

○踊
年酔のまじりても出踊かな
くらがりを仕なして居る踊かな